

主 題：教会の建て方 8

聖書箇所：エペソ人への手紙 4章15節

神がすべての成長を与えてくださいます。神だけがすべての成長の原因です。これは聖書的な真理であり、そのことは肉体的なことにも、また、霊的な事柄のうちにも見ることができます。けれども、神が成長を備えてくださること、神が成長させてくださるというこの事実は、私たちにある責任を除外することにはなりません。なぜなら、神は神が備えてくださった方法を用いて人々を成長させようと計画されているからです。このことを説明するその最も良い例を考えたときにこれではないかと思いました。それは胎児が母親のお腹の中で成長するその姿です。私たちがよく分かっていることは、私たち人間は自分たちがどれだけ願っても努力したとしても、いのちを造り出すことが出来ないということです。そして、造り出すだけでなく、最初にわずかに一つの細胞に宿ったいのちが、成長の過程をたどって赤ちゃんとして生まれて来る、そのように成長して行くことは人間の力で為すことは出来ません。それをするのは神の働きなのです。だからと言って、神が赤ちゃんを成長させるというその事実は、母親が何もしなくて良いということになるかと言うとそうではありません。母親は食事をしなければいけません。お腹の中の胎児が成長して行くように十分な栄養を備えなければいけません。また、栄養だけでなく、母親は安息を取らなければいけません。そのように母親は自分がしなければならぬ責任をしっかりと行なうことを通して、子どもの成長を促そうとするのです。その責任が母親には与えられているのです。

もう一度思い出してください。母親がどれだけ一生懸命子どもの健康に良いものを食べたとしても、どれだけ注意深く母親が体を管理して休みを持ったとしても、それは必ずしも子どもの成長に繋がることにはなりません。なぜなら、その成長を与えるのは神だからです。同じように、神は、霊的な成長に関しても、神だけがそれをもたらしことができると私たちに教え、そのことを明らかにしつつ、私たちが自分たちの責任をしっかりと果たさなければいけないということも私たちに教えるのです。私たちに神が与えた方法を用いてしっかりと成長しなければいけないという責任が与えられているのです。

偉大な説教者の一人、R. C. ライルはこのように語りました。「多くの人は他の人に起こる恵みのうちにある成長というものに感心して、すばらしいと感嘆し、自分たちもそのように成長したいと願う。しかし彼らは、これらの人が成長するのは、何か特別な賜物や神からの特別な助けがあったからだと考えの傾向がある。そして、この恵みが彼らに与えられていないので、彼らは今のままの状態で満足しているべきだと考える。しかし、成長と恵みはすべての信徒の手の届く所に置かれている方法を用いることに深く関係している。そして、一般的な原則として、成長するたましいがこのように成長して行っているのは、彼らがこの方法を用いているゆえだ。」と。私たちクリスチャンは周りの人を見て、「あのようになりたいな。あのようになれたらすごいな。」と思います。このライル先生が言うように、私たちは時にその成長が何か特別な祝福のゆえにもたらされるもので、それが与えられていない以上、私たちは現状で満足するべきだと考えがちです。けれども、この先生がおっしゃったように、成長するための方法が与えられていて、その方法を正しく用いる人たちが実は成長しているのです。そして、その方法はすべての人たちの手の届く所にあるのです。

前回、私たちはその方法が神の真理、神のみことばであることを学びました。そして、この神のみことば、それこそが私たちの成長を促すという、そのことがまさに今私たちが見ているエペソ人への手紙4章11節から16節に出て来る内容の中心的なポイントでもあります。パウロはここで「教会の設計図」を教えてください。これまで見たように、この設計図にはこのようなことばが書かれていました。「キリストが教会に特別な賜物を持った者たちをギフトとして与えた。」と。そのことが11節に記されていきました。その者たちの責任、また、その賜物は何かと言うと、神の真理を人々に教えることでした。人々に教えて聖徒たちが整えられて奉仕の働きをし、遂には、キリストの似姿になって行く、そのことのためにキリストはこれらの者たちを与えられたのです。これこそがまさに教会の設計図です。キリストが再びこの地上にやってくられ、そして、私たちが主と顔と顔を合わせて完全にキリストに似た者になるその日まで、私たちはこの計画を実践して行かなければいけないのです。その日まで神はこのことをやり続けるようにと私たちに教えているのです。ですから、私たちは今、新しく教会の建て方を考えたり、教会のやり方を考え出したり作り出したりする必要は一切ないのです。神はもうそのことを教えてくださっているからです。

すべての時代において、神はこのように教会を建てて行きなさいと教えたのです。そして、これらの

事柄を見た後私たちは、このように神の計画に沿って教会を建てるなら、どのような結果を見ることが出来るのかということを考え始めました。そのことが14節から記されていました。今朝、私たちは、前回終わりが切らなかった二番目の結果をがいっしょに見て行きますが、これらの結果を私たちが見て行く中で、この教会において私たちは本当に神が設計されている設計図に沿って教会を建てているのかどうかを真剣に考え、それを吟味し、もし、そうであるなら、実際に私たち一人ひとりの生涯のうちに、また、この教会としてここに見ることが出来るような結果がしっかりと現わされているかどうかを吟味する必要があります。そのことを皆さんと見たいのです。今朝、この15節を詳しく見て行きますが、願わくは、そのことを通して私たちが自分自身を、そして、この教会をもう一度精査し、吟味し、私たちがパウロが教える教会のあるべき姿にどの位近づいているのかを判断し、考えて行きたいと思います。

エペソ4章11-16節を読みましょう。「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。：12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、：13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。：14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、：15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。：16 キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」、すでに話したように、この箇所は日本語の聖書では何個かの区切りに分かれています。原文で見るとこれは一つの文章です。この長い文章の中で、パウロは14節から、読者たちがキリストが教会に賜物として使徒たち、預言者たち、伝道者たち、牧師また教師たちをお与えになった結果として見るべきことが何なのかを言い表わそうとしていたのです。いったい、どのような結果なのでしょう？

☆教会の建て方

IV. キリストは予期すべき結果を明確にして彼らを教会に与えた

A. すべての信徒は成長を遂げる 14節

一番目の結果は14節でした。そこで私たちは、それぞれの信徒は成長して行く、そのような結果を見ることが出来るということでした。成長しなければならない、パウロは私たちクリスチャンは霊的に幼いままで留まり続けることは出来ないと言います。私たちはここで三つのポイントを見ました。

1. 霊的未熟に身を置き続けることは罪である

パウロはこの節で、クリスチャンがみな霊的に生まれ変わったとき、信仰を持ったときにみなが霊的に幼子として人生を歩み始めることを教えていました。けれども、その状態に留まり続けることは通常のことではない、むしろ、人々がその状態に留まっているなら、それは責められなければいけないと教えたのです。いつまでも子どもでいてはいけません。ヘブル人への手紙の中で著者は、パウロが言わんとするこの同じ事柄をこの手紙の読者たちに向かってこのようなことばで記しています。ヘブル5：12-13「あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならないにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。：13 まだ乳ばかり飲んでいような者はみな、義の教えに通じてはいません。幼子なのです。」非常に厳しいことばだと思いませんか？この手紙を受け取った読者たちの中には、長い年月をクリスチャンとして生きている人たちがいたのです。その人たちに対して著者は「あなたがたはもう何年クリスチャンをやっているのですか？年数だけを考えるなら、あなたがたは人々を教えることが出来るような成熟したクリスチャンとして生きていてもおかしくないでしょう？それなのに、どうしてあなたはまだ信仰の初歩を学び続けなければいけないような幼子なのですか？」と言ったのです。

皆さんどうですか？ 浜寺聖書教会は60年の歴史がありますが、私たちの信仰の年齢はどのくらいだと思いますか？この教会の成熟度はどうでしょうか？このようなことばを聞くと考えさせられませんか？パウロは言います。ヘブル書の著者は言います。「私たちは幼子のままで居続けてはいけません。それはおかしい。」と。だから、ヘブル人への手紙6章1節でこのように言います。「ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか。死んだ行ないからの回心、神に対する信仰、」、皆さん、私たちは霊的に幼い状態で留まり続けることは出来ないのです。そうであってはいけません。私たちは信仰の成長をし続けていなければいけないのです。

2. 霊的未熟の特徴は避けなければならない。

単に、霊的に幼子の状態が罪深いことであるだけでなく、パウロはここで霊的に幼子の状態で留まり続けることは非常に危険な状態であるから、私たちはそれを避けて行かなければいけないと教えました。パウロはそのことを非常に分かり易い二つのことばをもって表現していました。14節の後半部分にこ

のように記されています。「教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、」と。小さな船が大海で大波にもまれて今にも沈みそうになっているそのような状態に置かれている、それが幼子の状態だと。人生の様々な荒波にぶつかるときに、今にも転覆しそうになる状態は非常に危険な状態ですから、私たちはそれを避けなければいけません。また、様々な教えの風が吹いて来るときに、いろいろな事柄に惑わされてしまって、まるで風見鶏のように吹いて来る風の方に向かってクルクル回り続けてしまうなら、私たちは目的とする所に決して到達することが出来なくなってしまうのです。パウロは言うのです。「そのような危険な状態のままで居続けてはいけません。そこから離れなければいけません。」と。

3. 霊的未熟は悪魔に攻撃の機会を与える

サタンの攻撃の機会だと言います。14節「人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、」とあります。もちろん、パウロがここで先頭にあげている人たちは偽教師たちでしょう。でも、彼らの背後にいるのはサタンだったのです。サタンにとってクリスチャンが霊的に幼子で居続けることほど喜ばしいことはありません。サタンは残念ながらどれだけ願ったとしても、人々から救いを奪い取ることは出来ません。なぜなら、神が救った人物は救われているからです。神の手から人々を奪い取ることは出来ないのです。サタンにはそれが出来ません。でも、それができないゆえに、次に願うことは、救われた人たちが霊的に幼子で居続けることです。それならあらゆる悪を送ったら、彼らはパニックを起こしどうしようもなくなって、あたふたと慌てふためき、神を称えることを忘れ、神に逆らうことを選択し、神に喜ばれないことば、行動、思いを抱きながら生き続けると考えるのです。そのような人たちが世の光として地の塩として生きることが出来るでしょうか？できません。そのような人たちが神の栄光を現わすことが出来るでしょうか？できません。悪魔にとってそれほど嬉しいことはありません。サタンにとってそれほど望むことはないでしょう。だから、パウロは言います。「あなたがたがもし信仰的に幼子であり続けるとするなら、霊的な赤子であり続けるとするなら、それはサタンに絶好の機会を与えている。あなたがたは悪魔の助けをしている。そのような状態に留まり続けてはいけません。」と。パウロはするように私たちに勧めて行くのです。

ですから、クリスチャンは成長しなければいけないのです。霊的に成熟した者へと変わって行かなければいけないのです。それが一番目に見ることが出来る結果です。前回、15節で二番目の結果を見始めました。

B. すべての信徒はキリストに向かって成長する 15節

すべての信徒は、単に成長しなければいけないだけでなく、キリストに向かって成長しなければいけないとパウロは教えていました。幼子であり続けるのではなく、パウロはすべての信徒たちに「キリストに向かって成長するように」と教えています。そのことを伝えていきます。そうやって行くと宣言します。彼は私たちの成長がどこに向かって行くのか、その方向性を示してくれています。覚えていますか？この14節と15節は一つのポイントを二つの形で伝えてしていると話しました。双子のような節だと。14節と15節を凝縮して言いたいことだけにすると、「幼子であることを止めて成長しようではありませんか！」でした。14節でパウロは否定的に話し、15節では肯定的に、人々を励まし、具体的にどのように成長を遂げて行くことができるのかを教えて行くのです。前回私たちは、このキリストに向かう成長は、どのような時に起こるのかという、その二つのことを見ました。

1. 成長は信徒が望むときにのみ起こる

霊的成長、キリストに向かう成長とは、私たちがそれを心から願うときにのみ起こるということを見ました。そのことは最初皆さんにお伝えしたことでした。確かに、これは余りにも明らかなポイントです。けれども、非常に重要なポイントであることを私たちは覚えました。神が人々を成長させるという約束をしているにもかかわらず、人々は確かに霊的に成長することに困難を覚えます。なぜ、そのような困難が起こるのかというと、そこに一つの大きな原因があるからです。それは私たちがもっと霊的に成長したいという願望を、何らかの理由で失うことです。往々にして、人々は霊的な成長を遂げるといふ概念にあきらめを覚え、妥協をして行きます。彼らは努力することに疲れているのです。また、彼らは現状で満足するように自分に言い聞かせるのです。

多くの人たちは、確かに、問題を抱えながらも成長をして行きたいと願いその努力を払います。けれども、その努力がほんの数週間続いたとして、そこに変化が見られないと「やっぱりダメだ。」と言って諦めてしまうのです。本来なら、もし3週間、4週間しても変わらないなら、もっともっと努力して変わって行こうとしなければいけないはずなのに、「4週間もやったからもうこれで良いでしょう。努力したのにダメだったからもう諦めるべきなのです。」と、そのように考えてしまします。また、ある人たちは、「私は単なる一般信徒だからそんなに成長しなくても、神はこの状態で私のことを愛してく

ださっているし、この状態で私のことを受け入れてくださっている。」と考え、捉え、それで満足して、その上に成長して行こうとすることを止めてしまいます。どちらにしてもそこには妥協と諦めが起こっているのです。パウロはそうではありませんでした。パウロはコリント人への手紙の中でこんなことを言いました。Ⅰコリント9：26－27「ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはいません。：27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」、パウロが目指していたのは、キリストに似た者となることだったのです。パウロが目指していたのは、キリストのような生き方を自分がその生涯を通して行なっていくことだったのです。彼はそこに到達していないことをよく分かっていました。

私たちからしてみると、パウロははるかにキリストに近かったでしょう。成熟したクリスチャンでした。でも、そのパウロが言うのです。「私はそれでもなお今でもからだにむち打って、キリストに似た者となるために成長して行こうとしている。」と。それはパウロだけの個人的な願望ではありませんでした。パウロはコロサイ人への手紙1章28節で、彼がなぜその働きを、福音伝道を、教える働きを、使徒として為していったのか、その理由、その目的を書いています。「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」、この「成人」ということばは「完全に」と訳すことができます。キリストにあって完全な者になりたい、キリストにあって成熟した者になって欲しい、キリストに似た者としてキリストの前に立つことが出来るように、私はその働きをいつもやっています。だから、パウロは言ったのです。「私を見ならいなさい。私について来なさい。私が自分のからだにむち打ってキリストに似た者となろうとするように、あなたたちも同じようにその思いを持って進み続けましょう。」と。だから、パウロはこのエペソ4：15で「さあ、成長して行こうではありませんか！ いっしょにそれをやりましょう！」と訴えかけるのです。

2. 成長は聖書の真理を通してのみ起こる

また、私たちはこの成長が私たちが願うときにのみによって起こるだけでなく、みことばの真理を通してのみ起こることを前回見ました。パウロはここで原語を直訳するとこのようなことばを使っています。「むしろ、愛のうちに真理することによって、」と。新改訳聖書の訳者たちはこの「真理する」と訳したことばを「真理を語る」と訳しましたが、確かに、「語ること」もそこに含まれているのですが、このことばは「真理」という名詞の動詞形を使っています。日本語にはないのですが、そこには「語ること」だけではなく「行なうこと」も含まれているのです。もっと正確に言うなら、私たちが結論づけたことは「真理する」というその意味合いは、私たちが真理をしっかりと保つことです。しっかりと保っているゆえに、語ることも真理だし行なうことも真理になって行くのです。それを通して私たちは成長して行くということをパウロが私たちに教えたのです。

真理とは何でしたか？ イエスは言われました。ヨハネの福音書17：17「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」。これまで私は何度も繰り返してこのことを言ってきました。今日も言います。皆さん、私たちの霊的な成長において最も重要なこと、神の主権的な働きが一番重要で、それがなければ成長自体がないのですが、それを除いて私たちの成長において最も重要なことは「神のみことば」です。それ以外に他に何ひとつありません。この神のみことばが私たちの内に確かに保たれていること、それが私たちの成長の上で最も大事なことなのです。それは私たちがそのみことばを理解し、それを知り、それを信じ、それに信頼し、それを実践して行く生涯です。みことばを保つのです、みことばを守るのです、みことばにすがります、みことばに支えられるのです。私たちがあらゆる選択を、決断を、あらゆる行動をあらゆることばを、私たちの人生に起こるありとあらゆる事柄を、みことばという基準に基づいて考えて行くこと、行なっていくこと、それが私たちに成長をもたらすまさに唯一の方法なのです。それをする時にだけ、私たちは人生の大波に揺らされて恐れおののきながら大胆に生きることが出来ない人生から脱却し、ありとあらゆる教えの風に振り回されて、どこに行けば良いのか分からないような人生から卒業して行くことが出来るようになるのです。皆さん、何度も言います。教会の成長において、個人の成長にとって最も重要なことは聖書のみことばです。神の真理です。なぜなら、それこそが神が私たちの成長のために与えた方法だからです。

確かに、成長をもたらすために益となることはみことば以外にもあります。以前にもそのことを皆さんにお伝えしたことがあります。例えば「試練」、試練は私たちの成長を促します。「祈り」も私たちの成長に必要なものです。でも、皆さんよく考えてください。神が私に試練を与えたとしましょう。例えば、今日、教会の帰りに私の家族が車を運転して帰って行く時に事故にあって家族が亡くなったとしましょう。私には応答の仕方に選択があります。一つは「神さま、どうして私にこのようなことを為さ

れるのですか！」と憤り、悲しみに打ちひしがれて神の前に拳をつき上げて「私にはわかりません！」と言って怒ることです。そのような選択ができます。皆さん想像出来ますね。もう一つは、そのような状況の中で、深い悲しみの中に置かれながらも「神さま、あなたの最善が常に成されていることを私は知っています。私にはなぜあなたが私の愛する家族を取り除かれるのか全く分からないけれども、どうぞ、あなたのみこころのままにこのことを行なってください、私がそれを喜んで受け入れ、そのことを通して、神さま、あなたの栄光が現わされるようにどうぞこの事柄さえも用いてください。」と祈ることが出来ると思いませんか？出来るのです。同じ試練です、何が違うのですか？どちらが成長を促すでしょう？どちらが成長をもたらすでしょう？明らかに後者ですね。なぜ、そのように考えることが出来るのでしょうか？

それは、私たちが聖書の真理に基づいて、起こっている事柄を正しく判断するからです。私たちの周りには訳の分からないことがたくさん起こるではないですか？「納得がいかない、理不尽だ。こんなひどいことはない。」と思うことがたくさん起こります。その一つ一つの事柄を私たちが神の真理に基づいて正しく理解し、その真理に基づいてそれに応答しているか、そのことが私たちが成長するかしんないかの大きな鍵なのです。最終的にはみことばです。皆さんは祈ります。「どうぞ、私が成長することが出来るように神さま助けてください。この問題から変わって行くことができるように神さま助けてください。」と、その祈りは必要です、大切です、なければならぬものです。でも、未信者でも同じ祈りをしませんか？「神さま、この問題から私を解放してください。このことで私は困っているのです。」と。何が違うのですか？私たちの祈りがみことばに沿った聖書の真理に基づいた祈りであるかどうかだと思いますか？

私たちはよく祈ります。「神さま、どうぞこのことをしてください。でも、あなたのみこころが成されるように。」と。不思議なことに、私たちは「あなたのみこころが成されるように。」と祈っていないながら、自分の祈っている通りのことが起こらないと、自分が願っている通りのことが起こらないと、神に対して不平不満ばかり言います。そのような経験はありませんか？私もあります。でも、どこがみこころに沿っているのですか？神のみこころが私たちの祈りに対して「ノー」という答えであるとするなら、私たちは喜んでそれを受け入れなければいけないし、「どうぞ、私の祈りが、私の思いが、あなたのみこころに沿うように私を変えてください！」と常に祈っていないといけないと思いませんか？最終的には「みことば」なのです。最終的には神の真理なのです。皆さん、あらゆることにおいて私たちが成長するかしんないか、それは私たちがみことばに沿って物事を正しく理解し、みことばに沿って物事を正しく判断し、みことばに沿って物事に正しく応答するかどうかにかかっているのです。そのように正しく行なっていくときに私たちは成長して行くのです。

でも、単にみことばのその真理を行ない、それを語って行くだけでは十分ではないとパウロは言います。私たちはパウロのことは読んで行くときに、このことに気付かされます。

3. 成長は愛の中でのみ起こる

パウロは「愛をもって真理を語り」（15節）と言います。直訳すると「愛のうちに真理して」となります。パウロが言わんとしていることは、確かに、私たちはしっかり願わないと成長は起こらないし、みことばを通してでなければ成長は起こらないけれども、その成長は愛という環境のもとで為されなければ起こらないということです。つまり、成長は愛という環境においてのみ起こるのです。ある牧師がこの「愛という環境」という表現を使いました。このことばが非常にふさわしいと思います。愛という状況の中でと、そこに身を置いているのです。真理と愛が共存している場所でなければそこには聖書的な成長は見えないのです。私たちが真理を実践しても愛を行わないとするなら、そこには問題があります。また逆に、私たちが真理を実践せずに愛を行なおうとするなら、そこにも問題が生まれて来るのです。例えば、もし、私たちが愛のないまま真理だけを強調して行くとするなら、この教会は全く活気のない、全く喜びのない非常に乾き切った教会になってしまうでしょう。人々は何が正しいか何が間違っているかということだけに関心をもって、それを責めることにはやって、そのようなギスギスとしたものになってしまうでしょう。

エペソの教会は「あなたの愛はどこに行ったのですか？」と黙示録の中で言われました。例え、どれだけ素晴らしい教理を持っていたとしても、そこに愛を見ることがなければ、それはまるで機械的に動いているだけのものでしかありません。パウロはIコリント13章で言いました。「愛がないなら、何の値うちもありません。」（13：2）、「…愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。」（13：1）と。同時に、その逆のこととして、どれ程愛が実践されていても、そこに真理がなければそれも全く意味のないものです。これはひょっとすると、何の基準もなくありとあらゆる人を受け入れることと表現することが出来るかもしれません。このことを最も顕著に見ることができるのは、

クリスチャンが教会戒規を否定するときです。マタイの福音書 18 章でイエスは、罪を犯した兄弟姉妹たちに対して教会がどのように取り扱うべきなのかをきちんと教えておられます。その罪を責めプロセスを経た上で悔い改めないなら、教会は彼を未信者として扱い、教会から除名しなければならないと教えているのです。でも、残念ながら、そのことはなかなか教会の中で実践されることがありません。なぜ、それが起こらないのか、その一番の理由は「それは愛のない行為だ」ということばが教会の中にたくさん溢れているからです。「私たちはみんな罪人ではないですか。どうしてあの人だけがその罪をこのように責められなければならないのですか？」、「このようにみなの前で公表して教会からまるで追放するかのようにするなんて、そんな愛のない行為はないではないですか？」と。もし、そのようなことばが語られるとするなら、そこでそのように語る人たちが言っていることは、罪を犯した兄弟姉妹を責めること、彼らを戒めること、彼らが立ち返ることができるように彼らとの交わりを断つこと、それらすべてが愛という範疇から出ていることで全く愛のない行為であり、逆に、それゆえに、私たちはどのような罪を犯している人たちでも愛をもって受け入れなければいけないと宣言します。

皆さんよく考えてみてください。神は人間を悔い改めのない、また、イエス・キリストに対する信仰を持たない、また、その信仰がキリストに対する従順という形ではっきりと現わされることのない人物たちを受け入れると思いますか？神は罪を悔い改めない、イエスを信じないその信仰を、従順という具体的な形で現わして行くことのない人たちを受け入れますか？皆さん、答えはお分かりですね？答えはノーです。神は悔い改めない罪人を赦すことはありません。神はイエスを信じない人たちに永遠のいのちを与えることはありません。神は神のみこころを行なう者でなければ「わたしはあなたのことを知らない。」と言われるからです。でも、神は世を愛しているではないですか？神は愛ある方ではないですか？なぜ、神は受け入れないのですか？なぜ、愛しているのに罪人を滅ぼすのですか？愛ある方だから、世を愛しているのだから、罪を持ったままでも赦してあげたら良いではないですか？そのように真理を強調して「このようにしなければいけない」などと言わずに、すべての人を受け入れてあげたら良いではないですか？と。

でも、神はそのようにはしません。なぜなら、聖書的な愛には常に真理がいっしょに付いて来るからです。聖書的な真理は常に愛を伴うものです。そのどちらかが欠けているなら、それは聖書的な真理でも聖書的な愛でもないのです。パウロは言います。「愛のうちに真理しなさい。」と。パウロはエペソ人への手紙の最初の 3 章で、神の愛がどれ程すばらしいのかを救いの教理の中で具体的に強調して来ました。それがどれ程大きいものですばらしいものかを人々に教えて来たのです。そして、その愛をしっかりと理解して行くな、その愛という真理をしっかりと知って行くな、その真理は私たちに愛をもった人生を生み出すのです。エペソ 5：1-2 でパウロはこのように言います。「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。：2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」と。このことばは 4：1 に記されている「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」という、私たちが救われたその召しにふさわしい歩みがどういうものなのかの具体的な現われの一つです。私たちクリスチャンは神の愛を知って神によって救われたなら、愛のうちに歩まなければいけないのです。もし、私たちが愛のうちに歩むことがなければ、どれ程真理が語られていてもそこには成長は生まれて来ないのです。

皆さんのうちに愛があるでしょうか？神に対して増し加わって行く愛、お互いに対する豊かにあふれる愛…。ペテロはパウロが言っていることと同じことをこのようなことばで表現しています。I ペテロ 1：22 「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい。」と。ここにも「真理」ということばが出ています。真理を知ってそれに従うようになると「偽りのない兄弟愛を抱くようになった」と言うのです。その結果起こることは「互いに心から熱く愛し合いなさい。」ということです。私たちは成長を望まなければいけません。また、その成長はみことばを通してのみ起こるのです。でも、その成長は愛のある所にもたらされるのです。それが私たちが成長して行くために必要なものです。神に対する愛、お互いに対する愛、未信者に対する愛、増し加わっているでしょうか？

4. 成長は信徒をかしらにふさわしい者にする

最後に、パウロはここで私たちにもう一つ大切なことを教えようとしています。私たちはこれまで私たちが愛という環境のもとで、真理のことばを通してのみ成長して行くことを学びました。そして、それは私たちがそれを望まなければ起こらないということを学びました。最後に、パウロはこの 15 節の後半部分で私たちにこの成長は「すべての信徒をかしらにふさわしい者とさせる」ことを教えます。成長は、すべての信徒をかしらにふさわしい者にするのです。何度も言いましたが、この 15 節のことばは「さ

あ、成長しようではありませんか！」という一つのポイントに掛かっています。パウロはここで私たちがどこに向かって成長して行くべきなのかを教えています。それが「彼に向かって」と直訳することができますことばで表わされています。「彼」とはもちろん「キリスト」です。新改訳聖書は「かしらなるキリストに達することができる」と書かれています。パウロは「この方に向かって成長しようではありませんか！」とそのように言うのです。つまり、パウロが言っているこの成長とはあらゆる形の成長ではなく、ある特定の一つの成長のことを言っているのです。それは「キリストに向かって行く成長」なのです。キリストの方へ進んで行く成長です。この「成長」はパウロがもうすでに13節で私たちに告げていたことです。そこでパウロは、キリストが賜物として11節に記されている人々を与えたその究極のゴールが「…キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」と教えました。つまり、キリストの姿になること、「キリストに達すること」でした。

パウロはこのことをより具体的に分かり易く「人間のからだ」という比喻を使って教えようとしていたのです。パウロはすべての人がかしらであるキリストに向かって進んで行くことができるように、成長するように、達するようにと教えています。この「かしらなるキリスト」という表現、「かしら」ということばはこの手紙の中で他に2回使われています。1:22には「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。」とあり、そこでは「すべての権威者」、すべての事柄の上に立つ権威ある方としての「かしら」という意味でこのことばが使われています。また、5:23では「なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。」と、キリストのリーダーシップ、キリストがかしらである、リーダーであるということを表わすために使われています。

けれども、パウロはここでこの「かしら」ということばを通して、私たちにこのキリストこそが教会の、そして、すべての信徒一人ひとりの生涯の中心であるという、そのことを教えようとしています。確かに、いろいろな註解書を見て行くと、ある註解者たちは非常に賢い観察をして、このように言います。皆さん、赤ちゃんが生まれてきたとき、赤ちゃんのからだは頭が大きくて不釣り合いです。ところが、成長につれてその頭の大きさにふさわしい体型に変わって行きます。確かに、その通りです。それもここで言わんとしていることと言ってもおかしくないでしょう。子どもが自分の頭のサイズに合わせてからだが成長して行くのと同じように、一人ひとりのクリスチャンはキリストというかしらにふさわしくかしらに合った肉体へと変わって行かなければいけないと言っていると、そうであってもおかしくないでしょう。でも、先程言ったように、ここでパウロが言わんとしていることは、そのサイズのことではなくて、どのような役割を果たして行くのかということ以上に、キリストが私たちクリスチャン一人ひとりの、また、教会の中心でなければいけないと言わんとしていると思うのです。すべてのクリスチャンはキリストに向かって成長して行きます。私たちの全生涯の中心点がキリストとなり、私たちが行なって行く人生のすべてのあらゆる事柄がキリストを現わすものでなければならぬと、パウロはそうように語っているのです。

私たちのこの頭は私たちの生活の全てを司っています。私たちにいのち継続させるその働きをするのも頭です。私たちが意識していなくても心臓が動き、中枢神経が働くのは私たちの脳が機能しているからです。また、脳が考え、脳が行なおうとすることを私たちが実際に行なって行きます。それと違うことはできません。それと同じように、パウロはここで、私たちがクリスチャンとしての人生の中心がキリストとなり、私たちの行なうありとあらゆることが、キリストが思い、キリストが願い、キリストが求めることの反映であるようにありなさいと、そのように語るのです。私たちがこのかしらであるキリストにふさわしい者になって行くとき、私たちの生涯がキリストに満たされて、その人生にキリストを見ることが出来るようになって行くときに、私たちは神の栄光を大いに現わします。そこに神がいることが分かるのです。

この成長をパウロは「あらゆる点において」と言います。ありとあらゆる部分において、すべての事柄に関して起こっていなければいけないのです。一部分ではないのです。あらゆる部分でそれが見えなければいけないのです。信仰においても、知識においても、一致においても、愛においても、私たちの人生の中に起こって来るあらゆる事柄において、私たちはキリストに向かって成長していなければいけないのです。あらゆる事柄がキリストを中心として、キリストのその表現の現われとして行われて行くようにならなければいけないのです。このことは、私たちが真理を知り、真理を理解し、真理を告白し、真理を信じ、真理に従って行く時にのみ起こって来ます。いや、正確に言うなら、愛のうちにその真理を為して行くときに起こって来ることなのです。それこそが唯一私たちが成長して行く方法なのです。

今週みことばを見ている中で、今回、私はすごい発見をしたと思いました。このエペソ人への手紙を読みながら、3章の後半に出て来るパウロの祈りに目が止まったのです。パウロは1章から3章まで、

救いについてすばらしい話をして行きます。教理を教えるのです。神の愛がいかに優れたものであるかを教理的にしっかりと教えた後で、3章の終わりにエペソの人たちのために祈りをささげます。14節からその祈りが出て来るのですが、その内容は三つの具体的な祈りです。それらの三つは別々の祈りではなくて、一つの祈りのリクエストの上に次のリクエスト、その上に次のリクエストが重なって行くような、そのような祈りがささげられたのです。

エペソ3：14－19、「こういうわけで、私はひざをかがめて、：15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。：16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。：17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、：18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、：19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。」

1. 一番目の祈り

16－17節「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。：17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。」、ここまでが最初のリクエスト、願いです。ここでパウロは内側の人が聖霊を通して神の力によって強められ、その結果、キリストが私たちの心のうちに永住してくださるようというのを祈っているのです。この「住んでいてくださいますように」というのは、私たちが救われたときに聖霊が内住してくださるという、そのことではなく、キリストが私たちのうちに確かに根ざし、そこで居を構え、そこにいることが自分の家にいることであるという状況になっている、そのような心の状態のことです。そのことをまとめて言うなら、ここでパウロが祈っていることは霊的な成長です。主が私たちを強めてくださり、神の栄光の豊かさに基づいて私たちを強めてくださるときに、私たちの内側は強くなって行きます。私たちが神の目的とみこころに沿って物事を考え行なっていくことが出来るように、神が私たちを強めてくださるのです。そして、それが起こって行くときに結果として、キリストが私たちのうちに心地よく永住するようになります。ここで言う「住んでいる」というのは、イエスが他人の家にお邪魔しているかのように居心地悪そうにしているのではなくて、もう自分の家ですとくつろいでいる姿を表わしているのです。そのためには私たちが神のみこころに基づいて物事を考え行なっていくようになっていなければいけません。その助けは神がその測り知れない豊かさから、私たちを力づけてくださることによって起こると言います。このようにキリストが永住してくださる状況には、必ず、霊的な成長が伴っていると思いませんか？このような状態であつたら霊的に成熟していると思いませんか？キリストはゲストではなくなってしまうのです。もう私たちのものとして、私たちのうちに、いや、私たちが主のものであるとして永住してくださるのです。なぜ、そこに心地良さを見出すのでしょうか？私たちが神のみこころに従順に従うとするからです。どんなに大変なチャレンジであっても、どんなに高い要求であっても、主の力が私たちを強めてくださるから、私たちはそれに対して「はい、行ないます」と言い続けることが出来るのです。それを実践して行くことが出来るようになります。

2. 二番目の祈り

二番目の祈りはその後、「また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、：18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、：19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。」、要するに、あなたがたがそのように成熟して行き、キリストの愛をもっともっとしっかりと知って行くことが出来るようにと言うのです。そのためにパウロは前提を置いたのです。それが17節の後半部分「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、」です。非常に興味深いことばが使われています。「根ざし」、根っここの働きはご存じですね。植物の根が栄養素を吸い取って植物全体に栄養が行き渡るようにしていることでもあり、同時に、根はその植物がそこにしっかりと根ざして、大きな雨風がやって来ても吹き飛ばされることがないように土台となります。パウロは言います。「あなたがたがそうなっているなら、もっともっと愛を知ることが出来るように。」と。逆に言うなら、愛に根ざしていなければもっともっとキリストを知ることが出来ないのです。また、「基礎を置いている」と建物のことを言っています。基礎がなければ建物は建ちません。でも、あなたがたはもう基礎が据えられているでしょう。だから、もっともっとキリストの愛を知って行ってくださいと言うのです。

3. 三番目の祈り

三番目のリクエストは19節の後半、「こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たさ

れますように。」ということです。この「満たされる」ということばを私たちはこのように使います。聖書の中でも使われています。例えば、「あなたは怒りに満たされましたね。」「喜びに満たされていますね。」と。それは「満たされている」というものに支配されていることです。怒りに満たされている人は怒りに支配されているのです。喜びに満たされている人は喜びに支配されているのです。パウロが言うことは「神さまに満たされなさい。神さまに完全に支配されなさい。」です。それがパウロがエペソの教会の人たちにこのようになって欲しいと神に願ったことなのです。なぜでしょう？パウロは神だけが成長を与えることが出来ること知っていたからです。だから、神にこの祈りをささげたのです。でも、パウロはもう一つのことも分かっていました。それは、確かに神に祈らなければこのことは起こらないし、神が成さなければこのことは起こらないのですが、私たちにも責任があるということです。

皆さん、気が付きませんでしたか？今、簡単に3章の後半の祈りの部分を見ていますが、これはパウロが4章11節から16節で語っていることと全く同じことです。「真理に根ざそうではありませんか。愛にしっかりと根ざしているのだから、あなたがたはもっともっとキリストを知るようになりましょう。そして、キリストの満ち満ちた身たけにまで達しましょう。」と、同じことを言っていないか？これは私たちの責任でもあります。皆さん、神はその方法を備えてくださいました。私たちに必要なのはこのみことばです。神はこのみことばを伝えるために教会に賜物をお与えになりました。教会はそのみことばを聞き、聖徒一人ひとりが整えられ、奉仕の働きをし、満ち満ちたキリストの豊かさにまで成熟して行くのです。

どうですか？皆さんは成長しておられますか？皆さんはキリストに似た者へと変えられていますか？願わくは、それが「イエス」であるように、「はい。確かに、たくさんの問題を抱えているけれど、私はそのように願って止まないし、そのようでありたいと願い続けています。神の助けによって少しずつではあるけれど変えられています。昨日よりも今日、先月よりも今月、去年よりも今年と。私はもっともっと成長して行きます。」と…。パウロと同じように、私たちも自らに鞭を打ち打ちたたきながら、キリストの似姿を目指していっしょに進んで行きましょう。